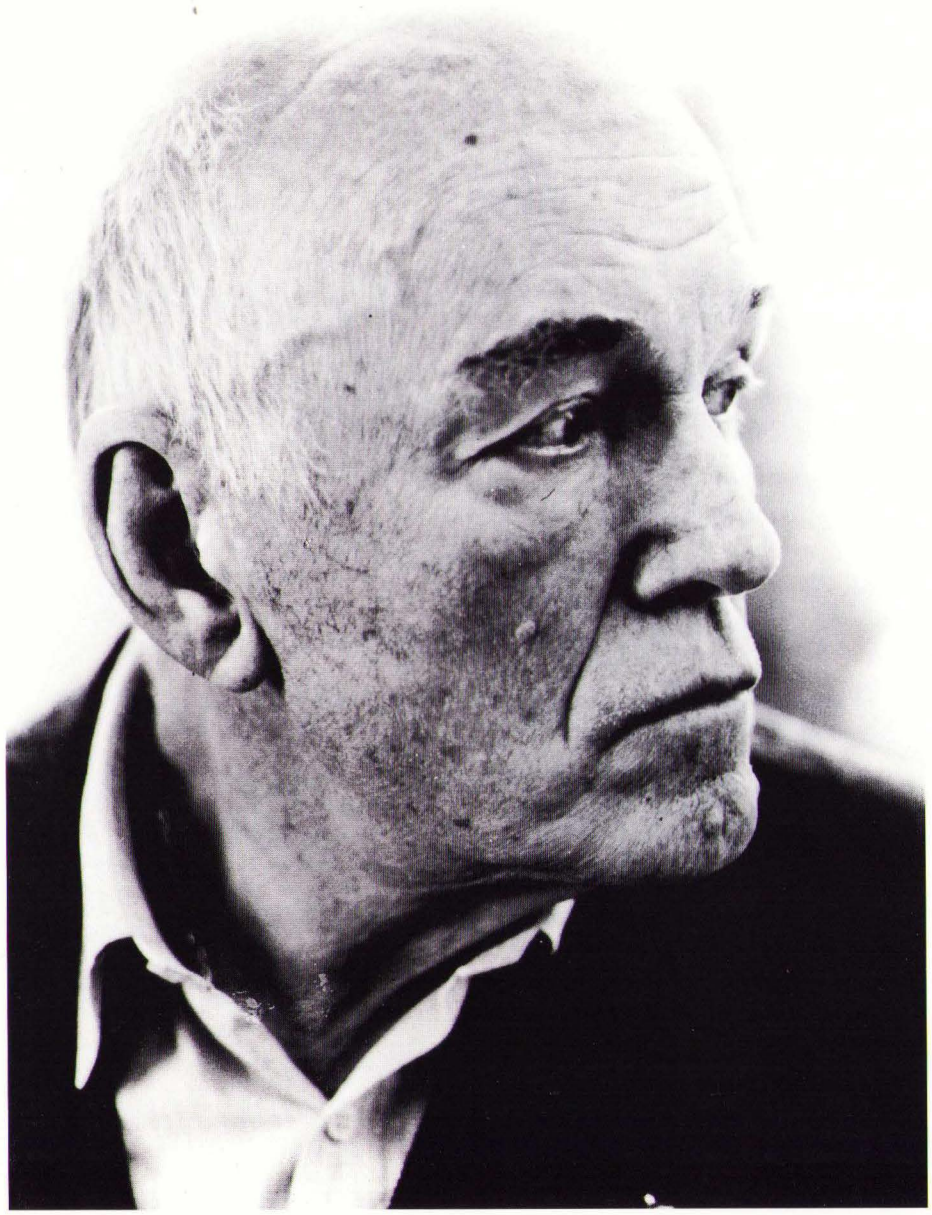
SVIATOSLAV RICHTER PIANO RECITAL

スヴャトスラフ・リヒテル ピアノ・リサイタル

1994年日本公演



スヴャトスラフ・リヒテル

なぜ私は最低限度の照明で演奏するのか。

これは、私自身の楽しみのためではなく（私に対して持っている好意的な、または批判的なイメージによって）人々が想像したがるような訳の分からないミステリアスな理由のためでもなく、聴衆自身のためなのです。

我々は今、視覚優先の時代に生きていますが、これは音楽にとっては最悪の事態です。

指の動きと顔の表情は、音楽そのものを反映しているのではなく、音楽を作り上げる過程を映し出しているだけであり、それは音楽を的確に理解する上で何の役にも立ちません。聴衆がホールの内部や他の聴衆を見たりすることも、その集中力を妨げ、想像力をそらし、聴衆と音楽との間の障害となります。音楽は純粋に、聴衆に届かなければなりません。

皆様のご健康を祈りつつ、暗闇が、眠りを誘うのではなく集中力を増すことを期待いたします。

なぜ私は楽譜を置いて演奏するのか。

かなり前から直感的にそうすべきだと思っていましたが、演奏会で楽譜を前に置くことに決めたのは残念ながら大分たってからでした。

現在ほどレパートリーが広くなく、また複雑でなかった時代には、慣習として楽譜を見ながら演奏していたのですが、これはまるでパラドックスのようです。この賢明な慣習はリストによって中断されました。今日の時代、頭脳は、音楽で一杯になっている、というよりも、不要で過剰な情報が詰め込まれ過ぎて、頭脳そのものを疲れさせてしまう危険性があります。

聴衆の心に触れる良い音楽を作らなければならないのが第一の問題であるべき時に、無駄な努力の原点となる「暗譜」というこの記憶力の競争の類は、全く子供じみていて空虚なことです。これは悪い慣例であり、親愛なるゲンリヒ・ネイガウス教授が強く批難していた、偽りの栄誉です。

聴衆をだまし音楽を荒らし回ってしまう、演奏家の「自由」と「個性」の放縦さは、音楽そのものに対する尊敬の念と、謙虚さの欠除からきているに過ぎないのですが、楽譜は、演奏者をある秩序へと絶え間なく呼び戻し、その放縦さに歯止めをかけるでしょう。

もちろん、楽譜を前にして完全に自由であることは容易ではありません。それは多大な時間と努力、練習と慣れが必要であり、だからこそ出来るだけ早い時期から始めなければならないのです。

この健全で自然な方法を採り入れることは、相も変わらぬレパートリーで我々ピアニストと聴衆を一生退屈させないばかりでなく、自分自身のためにも、より豊かで変化に富む音楽生活を創造できるのだということを、私はここで若いピアニストたちにアドバイスしたいと思います。